

## 捕らえられるイエス

### マルコによる福音書 14 章 43～52 節

今朝、わたしたちに与えられておりますテキストは、すでにイエスさまの十字架の死まで 15 時間ほどの、金曜日の真夜中の出来事です。ここからは、なんといったらよいのでしょうか、イエスさまがモノのように扱われてゆきます。舞台は、過越しの食事を終えてから向かったオリーブ山の果樹園、ゲッセマネの園です。ここへ向かう道すがら、イエスさまは、これから起きる出来事によって、あなたがたはみなわたしにつまづくだろうと予告をなさっていました。まさにその時が来たのです。今日の聖書箇所には「裏切られ、逮捕される」という小見出しがつけられています。43 節「さて、イエスがまだ話しておられると」とありますように、ゲッセマネの園で祈りを終えられた主イエスが、「立て、行こう、見よ、わたしを裏切るものが来た」と言われていたところに、それを遮るようにユダがやってきた。このユダについてはきちんと「十二人のひとりである」とマルコは書いています。ユダの裏切りの理由は明らかにされていません。すでに祭司長たちのところへ出かけて行って引き渡す相談をしており、それがこの個所で「わたしが接吻する人がその人だ、捕まえて逃がさないように連れてゆけ、」との打ち合わせになっています。祭司長たちはユダに事前に金を渡しており、イエスがモノや、家畜のように金で売り買いされたことがわたしたちの心を重くします。もちろんイエスさまはこのことに気づいておられ、二度にわたって、裏切る者がいると過越しの食事の場面で発言をなさった。ユダを思っていることです。興味深いのは、そのとき弟子たち全てが「まさかそれはわたしのことでは」と主イエスに訊いたことですね。この「ゆらぎ」の感覚

というのでしょうか、もしかしたら自分も、という視点は、わたしは大丈夫、わたしは出来る、という根拠のない自信よりもましな気がします。人間というものは、いざという時に直面しなければ自身の弱さ、もろさ、いたらなさになかなか気づかされることはありません。ここまでの道中を思い出してみても、ゲッセマネの園で「目を覚ましていなさい」と言われていた側近のペテロには「たとえご一緒に死ななければならなくなったとしても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」という言葉があり、ヤコブとヨハネの兄弟にも「わたしが飲もうとしている杯が飲めるか」「飲めます」という会話がありました。実際には、どちらもみずからが口にした通りにふるまうことが出来ませんでした。責めようとして言っているのではありません。彼らの熱意や、善良さは疑いない。しかし、イエスさまが言われたように「心は燃えても、肉体は弱い」のです。だからこそ人間には主の憐みと罪の赦しが必要なのです。50 節に「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった」と書いてありますから、背を向けたことはみな同じです。するとこの場面でのユダの「裏切り」と弟子たちの場合は「つまづき」とされることの違いは为什么呢。日本語のニュアンスでいうと裏切りには卑怯とか、汚いという感じがつきまといます。つまづきはそれにくらべれば評価が感じられません。そこで新約聖書のギリシア語を見てみますと、「裏切り」というのは「パラディドーミ」という動詞ですが、これはほかに「手渡す、引き渡す、任せる、委ねる、」という意味があります。受難予告で「人の子は祭司長、律法学者たちに引き渡され」とあるのも「パラディドーミ」です。14 章 10 節以下に「ユダ、裏切りを企てる」という小見出しがありましたが、あそこにも「イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところに行った」「引き渡せるかとねらっていた」と書かれていて、「パラディドーミ」が使っている。

言葉の意味としては「裏切り」よりも「引き渡し」がおそらく正確なのです。それが過越しの食事の個所では「裏切り」と訳された。「わたしと一緒に食事をしている者がわたしを裏切ろう（引き渡そう）としている」「人の子を裏切る（引き渡す）その者は不幸だ。」ここにはユダについての読み込みが働いて、引き渡すを裏切りと訳したと思います。ただ他の弟子たちと違う点は、そこにユダの意志がはっきりあること、ペテロを始めとする他の弟子たちは自覚的にイエスを引き渡そうとする意志を持ってはいない。そこは区別しなければならないと思います。むしろペテロを始めとする他の弟子たちの問題は、イエスさまとともに自分を引き渡すことが恐ろしくて出来なかったことにあります。ここがポイントですね。今回、マルコによる福音書の受難の個所を通して、イエスを引き渡すか、自分を引き渡すかの違いがとても気になりました。つまり、この「引き渡す」あるいは「引き渡される」ということが、主イエス・キリストの、苦難のメシアとして負わなければならなかった闘いの正体ではなかったかということです。受難とは「引き渡される」ことなのではないでしょうか。弟子たちは自分がユダヤ当局に引き渡され、どのような目に遭うか恐ろしかった。だから主イエスを捨てて逃げました。自分の命が惜しかった。怖かった。誰でもそうでしょう。不安、恐怖、中傷や迫害の危険など、それはわたしたちが自分の思うように行動出来ない、決定できない事態に巻き込まれることです。日常が非日常に変わることです。そこでわたしは自分の人生の主人公ではなくなり、思うままにふるまうことが出来なくなる。病気の支配下に置かれたり、職場の力学の下に置かれたり、世間のしがらみやネットの批判にさらされたり、受け身になるのです。引き渡されるとは、つまるところそういう事態でしょう。いまイエスさまは逮捕され、当局の遣わした者たちに小突き回される立場になります。小競り

合いもおきました。大祭司の手下に剣を抜いて切りかかった者もいた。暴力の渦の中にイエスさまは巻き込まれる。その捕り手たちを見て、イエスさまは「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに」、そういわれました。だれも軍馬に乗ってではなく、ロバの子に乗ってエルサレムに入られたキリストの覚悟を見て取る者はいなかったのです。この方は剣を取って戦いに来られたのではない。非暴力をつらぬかれています。しかし、その方が引き立てられ、この後、当局の組織的な暴力の中に、扇動された群衆のとりまく偽りの裁判のなかに放り込まれます。そこではイエスさまの主体的な行動は制限されてしまう。彼らの手のなかに引き渡されているからです。このことについてイエスさまは「聖書の言葉が実現するためである」とだけ仰いました。もしかしたら「屠り場に引かれる小羊のように、毛を刈る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかった。」というイザヤ書 53 章「苦難の僕」が頭にあったのかもしれませんが。今朝の説教で、わたしが申し上げたいのは、本来、「引き渡す」側におられる神が、わたしたちを「引き渡す」権威と力をお持ちの神が、このように「引き渡される」側に身を置かれたということです。どれほど、わたしたちは「引き渡される」ことを恐れていることでしょうか。自分の自由が制限されること、体が効かなくなり、お金が使えなくなり、自分の意志が周囲に認められなくなることを恐れているのでしょうか。しかし、人間は最終的にかならず死に引き渡されるのです。神がお造りになった被造物にはすべて寿命があります。太陽だって星としての寿命がある。この世に永遠はない。理性をもち、自我を発達させて生きる「神のかたち」をもつ人間だけが、この真実を受け入れることが本当に困難です。わたしたちは自分の人生の主人公でありたいと思っている。世界の中心に自分を

おいて世界を仕えさせたいとすら願っている。しかし、わたしたちは創造主である神ではありません。造られた者です。被造物は虚無へと引き渡される存在であることを聖書ははっきりと告げています。引き渡されまいとあがく人間の弱さ、醜さ、愚かさを聖書ははっきりとわたしたちにつきつけます。しかし、イエスさまは、人間が避けたいと心から願っている、この恐ろしい「引き渡される」という運命を、一番残酷なかたちで体験されました。弟子にキスを合図に裏切られ、捨てられ、熱狂的な群衆に嘲られ、唾をはかれ、頭をはたかれ、十字架を背負わされ、裸当然の姿ではりつけにされて衆人環視のなか血を流し、呼吸困難で死んでゆく。偽りの裁判であり、ユダヤ人の歡心を買うためにイエスを犠牲とすることをピラトは知っていて、十字架刑に引き渡した。こういう「引き渡され」方をして死ぬことがメシアの苦難の杯でした。わたしども「引き渡されてゆく」ことを恐れる人間の代表として、その苦しみ、哀しみを担って下さった。木にかけられた者は呪われるとあるような、神の怒りを受けての死に「引き渡される」、それが十字架の死でした。この「引き渡され」てゆく不安と恐怖のなかで、自分が自分ではいられなくなる嵐のような状況のなかで、イエスさまは何を支えとされたのでしょうか。それはゲッセマネの祈りに示されています。それは試練と恐怖のなかで神さまにご自身を「引き渡す」祈りでした。主イエスの受難の出来事は、誰の手に、どのように引き渡されることが救いであるかをわたしたちに教えます。「引き渡される」＝「パラディドーミ」という言葉は「引き渡す」以外に「任せる、委ねる、」という意味もあるのです。ここに注意を払いたい。引き渡される場面で、わたしたちは同時に、ゆだねる相手を見定めるチャンスも与えられているのです。被造物の宿命である死へと向かう道でさえも「いばらの道」から「命の道」に変わるのです。それは詩篇 23 篇に「たとえ死の

陰の谷を歩むとも、わたしは災いを恐れませんが、あなたが共にいてくださるからです」。とうたわれるように、良い羊飼いに導かれるならば、人知を超えた平安に歩むことが許される。捕らえられたイエスはモノのように扱われ、この日の午後には磔にされました。この酷い扱いを受けて、主は、死へと引き渡されました。創造主である神を弁えることなく生きるわたしたちが、本来、迎えるべき刑罰としての死でした。それがキリストの受難となった。この死への歩みを通して、イエスさまは、わたしたちを永遠の命へと引き渡す道を備えてくださいました。わたしたちの身代わり、代表となられることで、イエスさまがわたしの救い主となって下さった。わたしのために死んで、そして神によってよみがえられたこの方に引き渡されるならば、わたしたちは平安なのです。「ゆだねる、まかせる、手渡す、裏切る、引き渡す」、さまざまに訳される「パラディドーミ」という言葉の中に、状況に振り回されて生きるわたしたちの本質があらわされています。人間だからこそ経験する振り幅の大きさ、生きる揺らぎがあります。キリスト・イエスは、まさにそこに身をおいて下さったのです。苦難のただなかにあつて、祭司長、律法学者、長老たちに引き渡されながら、しかし、ご自身の命を確かな、揺らぐことのない神に委ねることをも同時になさった。それが「わたしの思いではなく、御心がなりますように」という祈りの真実です。そして、そこに、わたしたちを憐み、愛して下さったこのお方の真実があります。救いの恵みを、ご自身の命で、十字架に刻んでくださったキリスト・イエスの御名を崇めます。わたしを委ねて、引き渡して、間違いのない方がここにおられます。

お祈りいたします。